

門田泰明

●警視庁特命狙撃手●



必 殺 彈 道

門田泰明
Kadota Yasuaki

警視庁特命狙撃手.....

徳間書店

ひっさつだんどう
必殺弾道
けいしちようくめいそげきしゅ
警視庁特命狙撃手

著 者 門田泰明

第一刷 二〇〇〇年五月三十一日

発行人 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区東新橋一―一六 郵便番号一〇五―八〇五五
電話 〇三―三五七三―〇一一一(代表) 振替 〇〇―一四〇―〇―四四三九二

印刷所 株式会社清菱印刷

カバー印刷所 真生印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価は帯・カバーに表示してあります。乱丁・落丁本はお取り替えします。

© Yasuaki Kadota 2000 Printed in Japan

〔編集担当 吉川和利〕

ISBN4-19-861180-7

必殺彈道

警視庁特命狙撃手

目次

第一章	死弾 しだん デヴァステイター	5
第二章	天賦 てんぷ の才 警視庁狙撃手 そげきしゅ	50
第三章	三連射浴び 我反撃 われ できず	84
第四章	狼は狼にあらずして薄笑 うすわらい	115
第五章	恐怖の病室 貫通弾道 かんつうだんどう 四発	150
第六章	応射せよ伏木巡査部長 ふせき ！	179
第七章	覗かせた猛獅子 のぞ の片鱗 あらじし へんりん	214
第八章	捜査一課 桑多警部射殺さる	246
第九章	激突プロフェッショナル二人	280
あとがき		326

装画 装幀
坂本勝彦
東京図鑑

第一章 死弾 デヴァステイター

(1)

午後七時過ぎ。

和やかな雰囲気が大蔵家の大広間に満ちていた。床の間を背にして座った主の唐吾郎のワインで赤くなった顔は、目を細め口元を緩めて満足そうだった。大広間の向こう端まで伸びたテーブルの両側には、一族の男女二十八人が血縁の濃い順に座っている。

今夜は唐吾郎の古稀を祝つての集まりだった。

唐吾郎が自分の手でグラスに赤ワインを注ぎ足そうとすると、「お父さま……」とやわらかな優しい声がそつと掛かった。

唐吾郎が「なあに、まだ大丈夫だ」と、静かに赤ワインを注ぐ。

彼に声を掛けたのは大蔵家の長女で、テーブルの右上座に座っている関東経済銀行頭取の矢洲子^{やしゅう}だった。

唐吾郎は亡き妻との間に六人もの子を得たが、六人とも女でそれぞれが婿を取り、大蔵家の結束が緩むことはなかった。

七十歳にしてなお矍鑠^{かくしやく}たる唐吾郎は、ワインをひと口なめて、雑談に花を咲かせている一族の一人一人の顔を眺めた。

彼はこの上もない幸福^{しあわせ}を噛みしめていた。自分のためにこうして皆が揃ってくれたとき、七十年の人生にひとかけらの無駄も無かったと思うのだった。年に一度の誕生会の時も、還暦を祝う会の時も、その思いが裏切られたことはない。

「顔が真っ赤ですよ、お父様」

唐吾郎を挟むかたちで矢洲子と向かい合って座っている次女の真沙子が、ワインクーラーを自分の方へ引き寄せ、軽く父親を睨みつけた。六人娘の中では一番唐吾郎に可愛がられた彼女は、その分父親思いだった。

娘に心配されることがこの上もなく嬉しい唐吾郎である。そうかね、とにこやかに頷いて真沙子と顔を見合わせてから、また一族の一人一人の顔を見ていく。

六人の娘婿たちは、唐吾郎に対して妻たちよりも身近に座ることは許されていなかった。大学教授、文部官僚、医師、県議員など足元のしっかりした地位にある彼らも、白髪^{はくはつ}の美しい金融

王の前では娘婿というよりは「他人」であつた。

その「他人」に向けられる時の唐吾郎の視線が、何かの拍子に鋭さを増すことを矢洲子も真沙子も気付いていた。

彼らの雑談の中に金融王批判が潜んではないか、と探るような目つきを見せていることを。

関東経済銀行はもう十数年の長きに亘つて『地銀の雄』と評価されてきた大蔵家がオーナーの、地方銀行だつた。抜群の財務内容を誇り、バブル崩壊で日本全土に吹き荒れた金融不安にもビクともせず、都銀の中位行を吸収するのではないかと噂されたことも一度や二度ではない。

大蔵唐吾郎は、その地銀の雄の代表取締役会長の職にあつた。

ただ経営の多くの部分は、今や矢洲子の采配に委ねられており、専務取締役の真沙子と三女で常務取締役の留伊子が、矢洲子を補佐している。

「さてと……」

唐吾郎が小さく呟いてからワインを飲み干し、片膝を立てた。

雑談に夢中になっている様子の娘婿たちであつたが、唐吾郎の動きに気付いてか、ほとんど一斉に上座へ顔を向けた。

「道雄君、書斎へちよつと付き合ってくれんか。あとの人は料理を存分に楽しみなさい。私のために今夜は本当に有難う」

唐吾郎はにつこりとして頷くと、着ている紵の着物の襟元を正しながらゆつくりとした足どりで大広間を出た。

彼の後に、留伊子の夫で県会議員の道雄が神妙な顔つきで従った。

枯山水の中庭に面した廊下を凹字型に回って、大広間とちょうど向かい合った位置にある部屋が唐吾郎の書斎だった。

「ま、掛けなさい」

書斎に入って、唐吾郎は娘婿にソファを勧めた。

道雄が「はい」とソファの端に、肩を縮めるようにして座った。

遠慮していると言うよりは、怖がっているという感じだった。

「コニヤックがいいかね、スコッチがいいかね」

「それではコニヤックを……」

唐吾郎はサイドボードからコニヤックとグラス二つを取り出してテーブルの上に置くと、中庭とは反対側の窓を開けた。網戸の嵌^はまっていない窓だった。

窓の外には明りを点^{とも}した小振りな石灯籠を何か所かに配した広い庭があつて、左手斜め向こうの堂々たる四脚門が大蔵家の底知れぬ財力を物語っているかのようだった。

「いい夜風だ。秋が近いな」

「そうですね」

義父に相槌を打ちながら道雄がグラスに琥珀色の液体を注いだ。

軒下に吊された風鈴が、ひと揺れふた揺れして澄んだ音色がひんやりとした風と共に書斎に流れ込んでくる。

唐吾郎は窓に網戸を嵌めるのが嫌いだつた。網戸越しに眺めると庭が曇つて見えると言い、風鈴の音色が割れて聞こえると言う。それを我慢するくらいなら、蚊の侵入を歓迎するという考え方だつた。

「道雄君、今夜は楽しかったよ。家族というものはいいもんだな」

「そう思います」

「ところで次の衆議院議員選挙だがね……」

四脚門のあたりへ視線を向けたままの唐吾郎の言葉が、そこで跡切れた。

「は……」と答えた道雄は、その直前にピシッという微かな音を耳にしたがほとんど気にしなかった。木造の家屋は気温の変化によって、木鳴りすることがよくあるからだ。

達磨の形をしたコニャックの瓶に栓を戻した道雄は、訝しげな視線を義父の背中に向けながら瓶をテーブルに戻した。

唐吾郎の両膝がガクンと折れたのは、その瞬間だつた。

「お義父さん」

背中から畳の上に倒れようとする義父の背中に、道雄は飛びついた。

義父を胸で受けて支えようとした道雄が、その体重に押し潰されるようにのけぞる。

道雄は決して小柄ではなかったが、唐吾郎は古武士の風格を漂わせる堂々たる体格の老人だつた。体重でも身長でも道雄を圧倒している。

「誰かあつ」

道雄は唐吾郎の背中の下で叫んだ。義父を押しつけようと思えば出来たが、その肉体に生じたらしい異変を想像すると、それが出来なかった。

はじめに娘婿たちが書斎に駆け込み、矢洲子や真沙子たちがその後が続いて、たちまち大騒ぎとなった。

唐吾郎が着ている絹の着物の胸部に赤い花が咲き、それが急速に花びらを広げつつあった。

「お父様、お父様」

叫びながら父親に触れんばかりの真沙子を、夫で医師の芳行が「救急車だ」と押し戻した。

娘婿たちが唐吾郎の体の下から慎重に道雄を引き出したあと、「私の部屋から応急カバンを」と言いながら芳行が素早く絹の着物とその下の肌着の胸元を大きく開いた。彼は国立病院の脳神経外科部長の職にある。

誰かが書斎から飛び出していく。

「これは……」

芳行は、そのあとに続ける言葉を失った。義父の左胸から激しく出血しているのは、小さな穴のせいだと外科医の彼には判った。

彼は右の掌をその小さな穴に強く押し当てた。

血液の噴き出し方が尋常ではないため、無駄だろうと判ってはいる。

もう一方の手の指先を義父の手首に当ててみるとやはり脈は消え、瞳孔反射も消失していた。

当然、自発呼吸も無い。即死だったのであろうか。

彼は矢洲子と視線を合わせて、首を横に振った。

真沙子がワッと泣き出し、「どうしてなの、どうしてなの」と芳行に武者振りついた。

その拍子に小さな穴を塞いでいた芳行の掌が大きくずれて、出血は一気に唐吾郎の胸に広がった。

それは唐吾郎の肉体が、生体から死体へと変わったことを否定するほど勢いある出血だった。

芳行は、掌を直ぐに穴の上に戻した。

真沙子の半狂乱は続いたが、それ以外の者たちを支配したのは沈黙と茫然自失だった。

なかでも道雄が受けたショックは大きかった。

無理もない。目の前でいきなり義父が倒れたかと思うと、胸から血を噴き出して息絶えてしまったのだ。その直前までは和やかな雰囲気、義父だっただけに、道雄には何が何だか訳が判らず真沙子の泣き叫ぶ声さえ耳に入らなかった。

彼は義父の頭の上にしゃがみ込んで、ただ唇を震わせるばかりだった。

「誰か警察にも連絡して」

芳行が出血点を押さえている自分の手の甲を見つめながら強い口調で言った。

港区白金に敷地二千余坪の大邸宅を構える大蔵家は関東経済銀行のオーナー家と言うだけではなく、唐吾郎の亡き祖父萬之助はある有力藩家老家の直系であったことから爵位を授けられており、したがって名門と呼ばれる家柄だった。

その大蔵家に警察が事件捜査を目的として訪れたことは、一度としてない。

だが「私が連絡します」と、矢洲子が電話台のほうへ歩いていった。

救急車がやって来たが、救急隊員がやるべき仕事はほとんど無くなっていた。芳行が自分の職業と義父の死を確認したことを、彼等に告げた。

大蔵唐吾郎の名は、財界人としても第一級の書家としても高名である。救急隊員たちは国立病院の脳神経外科部長から、その高名な唐吾郎の死を聞かされて、立ち竦

むばかりだった。

警察が到着すると、我を失っていた真沙子もいつもの自分を取り戻し始めた。関東経済銀行の専務取締役として、もともと誇り高い彼女である。捜査関係者が訪れたなら見苦しい「私人」を前面に晒し続ける訳にはいかない、くらいの用意は出来ていたのだろう。

(2)

事件現場の初期状態維持のため大蔵一族は警察によって大広間へ退げられ、出入口を二か所持った二十六畳もある純和風の書斎は遺体と捜査関係者だけとなった。

警視庁刑事部捜査一課で第二強行犯捜査係を率いる桑多庄造警部は窓のそばに立ち、黒々と生い茂った庭の木立の彼方左手に点々と覗いている明りを眺めた。

それがオフィスビルの明りかマンションの明りかを特定するため、すでに部下二人を向かわせている。

(それにしても大変な人物が殺^やられたものだ)

と思ひながら彼は振り返つて、検死官や鑑識班員が腰を下ろして囲んでいる遺体を見つめた。胸部からの出血は、もう止まっている。

風鈴がチリリンと鳴つて、秋の訪れを感じさせる夜風が桑多の首すじや頬を撫でた。

彼は書斎に入つて遺体の出血孔を見た瞬間から「射殺だな」という見方を固めていた。しかしいつの場合も検死官や監察医の結論が出るまでは、自分の見方を口に出すことは無い。検死は鑑識の欠くべからざる重要な分野であり、いわゆる「科学鑑識」のバックアップがあつてこそ刑事の捜査は存在すると信じて疑わぬ桑多だつた。

彼はまた窓の外へ視線を戻し、それにしても何と凄い屋敷であることか、と溜息を吐いた。よく手入れされた広い庭、鬱蒼と育っている樹木、現在^{いま}ではすっかり珍しくなつた白壁の高い土塀、そして豪壮な構えの四脚門、それらが夜目にもはつきりと窺^{うかが}えた。

うらやましい、という感情などは屋敷内へ一步入つたとたん生じた「うわあ」という驚きによつて、押さえ込まれてしまつてゐる。

後ろから「二発だな」という呟きが聞こえてきたが、桑多は振り向かなかつた。

彼がこの部屋に入つたときに認めた出血孔は胸部の一つだけだつたから、その呟きは彼にとつて新たな情報だつた。

射殺となると窓の外側からとしか考えられなかつた。状況から判断して、倒れた唐吾郎の下敷きとなつた道雄を怪しむことは、ひとまず外してもよさそうだつた。

（あの建物の屋上、もしくはどれかの部屋の窓からなら狙撃できるが……しかし、かなりの距離だなあ）

桑多がそう思ったとき、遺体のまわりにいた鑑識班の一部が、上司の指示を受けて別の動きを取り出した。障子が嵌^はまった丸窓や違い棚がある書斎の西側へ寄つていったのだ。

そのざわつきで桑多が体の向きを変えかけたとき、「桑多君……」と声が掛かった。

検死官が死体から目を離さず、右手をヒラヒラさせて桑多を手招いていた。その横で桑多と同じ年の酒呑み仲間である鑑識班のチーフ浦地等が厳しい顔つきで手帳に何やら書いている。

桑多は遺体を挟んで検死官と向かい合った位置に、腰を下ろした。

検死官の名は根本澤順一。警視庁刑事部鑑識課に籍を置く『死体取扱専門官』の警視で、四十一歳の桑多より十年先輩だった。これまでに約千五百体の遺体を扱ってきた検死の大ベテランで、鑑識課に所属しているとは言っても独立色の強い立場であり、刑事調査官とも言われている。

「桑多君に改めて言うまでも無いと思うが、これは二発撃たれとるよ。一発は擦り傷で額のここ、もう一発は致命傷の胸」

桑多は根本澤警視が指先で示した唐吾郎の額に、顔を近付けた。

「額を擦った弾^{たま}は、この書斎のどこかにある筈だよ」

根本澤が、そう言つて室内を見まわす目つきをする。

うつすらと擦過されたような痕跡が唐吾郎の額に認められたので、桑多は「うむ」と頷いた。とは言つても一見しただけでは、それとは識別できない程度で、桑多は今更のように根本澤警視